



Title	第7回臨床哲学フォーラム 「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」の特集にあたって
Author(s)	小西, 真理子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 2

第7回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけてられる声を聴く）

テーマ「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」

第7回臨床哲学フォーラム
「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」
の特集にあたって

小西 真理子

日時：2022年6月1日（水）17:00-19:30

場所：オンライン（Zoom）

講師：小松原織香さん

【企画趣旨】

2022年1月に出版された小松原織香著『当事者は嘘をつく』を起点として、著者である小松原さんが経験された「研究者と当事者」のあいだで揺れ動きについて、そして、それでも研究者になるということが小松原さんのなかでどのようなことだったのか／どのような意味をもっていたのかということについてお話いただきます。いわゆる「当事者研究」とは少し違う、当事者が行う研究のあれこれについて、小松原さんといっしょにお話できればと思っています。学生さんや研究者の方はもちろん、何らかの「当事者」である方、小松原さんのご著書に感銘を受けられた方など、どなたでもお気軽にご参加ください。

【プログラム】

17:00-17:05 趣旨説明、登壇者紹介：小西真理子（大阪大学）

17:05-17:35 「研究者になるということ：当事者と研究者のあいだで」：

小松原織香（日本学術振興会特別研究員 PD：関西大学）

17:35-17:45 質問者①：鈴木萌花（大阪大学大学院生）

17:45-17:55 質問者②：吉田裕香（大阪大学大学院生）

17:55-18:05 質問者③：二宮晃紀（大阪大学大学院生）

18:05-18:15 質問者④：六郷颯志（大阪大学大学院生）

18:15-18:35 院生コメントへの応答

18:35-18:50 休憩

18:50-19:30 小松原さんへの質疑応答

2022年6月1日（水）に第7回臨床哲学フォーラム「研究者になるということ：研究者

と当事者のあいだで」を開催し、日本学術振興会特別研究員 PD の小松原織香さんにご講演いただきました。

小松原さんには、2020 年 7 月 1 日（水）に開催した第 1 回臨床哲学フォーラム「非人間・暴力・対話——関係性をめぐって」にご登壇いただいたことがあり、臨床哲学フォーラムにご登壇いただくのは今回で 2 回目でした。第 1 回臨床哲学フォーラムの様子は『臨床哲学ニューズレター』vol.3 の特集 4 にて紹介していますので、興味のある方はぜひご覧ください。それから 1 年半ほどが経過して、小松原さんによる哲学エッセイ『当事者は嘘をつく』が刊行されました。小松原さんからは事前にご著書のなかで第 1 回臨床哲学フォーラムについて言及することをうかがっていたので、本著書の刊行を私自身もとても楽しみにしていました。ご執筆いただいたような文脈で、臨床哲学フォーラムについて書いていただけたことを本当に嬉しく思っております（フォーラムについては『当事者は嘘をつく』の最終章である第 9 章「語りをはらく」で言及していただいています）。もちろん、それだけでなく、ご著書の内容から、特に若い世代の研究者や本研究室学部生・院生さんに小松原さんのお話を聞いていただきたいと思い、このフォーラムを企画しました。

『当事者は嘘をつく』では、小松原さんが当事者として性暴力被害に苦しんだ経験を出発点としながら、そこからの回復の物語として彼女が研究者になるということが大きな意味をもっていたことが描かれていました。当事者かつ研究者であったり、当事者と研究者のあいだで揺れ動いていたり、はっきりと当事者でなかったとしても研究という営みに自らの実存を賭けたり、あるいは、自分が当事者でないことに苦しんでいたりする若い世代の研究者（の卵）は潜在的にも顕在的にも相当数いるのではないかと思います。小松原さんのご著書の読み方のひとつとして、そのような研究者たちと何か呼応するようなものがあるのではないかと思います、このフォーラムを企画しました。

小松原さんにはご多忙ななか、留学先のベルギーより、オンラインにてご登壇いただきました。私にとって、自身の研究関心の核心部分を共有できる数少ない研究者のお一人である小松原さんとの再会は、個人的にも喜ばしいことでした。第 1 回フォーラムとは異なり、第 7 回臨床哲学フォーラムは公開イベントでしたが、ご著書が大変に話題を呼んでいたこともあり、平日の夜の開催にもかかわらず 150 名程の方々にご参加いただいたと記憶しております。フォーラムでは小松原さんのご発表に加えて、臨床哲学研究室の大学院生の方々による特定質問も行いました。それぞれの質問に丁寧にお答えいただいた小松原さんには改めて感謝したいと思います。また、フォーラムに感想文をお寄せくださった方々もありがとうございました。

日本における若手研究者（の卵）たち、特に、研究者と当事者のあいだで揺れ動きながら研究しているような人びとが、苦しみながらも、それでも楽しいものとして、研究という営みに関わっていけることを願っております。

（こにし・まりこ）